

# 仙巖園と借景

## 1 海にひらかれた庭

---

### 桜島を借りている

「わはあ——————(\*´▽´)」

仙巖園で桜島に出逢ったらその力をきっと感じるはず。

そしてこの庭園が桜島も含めてつくられてる、景色を借りて作られていることも感じられるはず。でも、仙巖園の借景はもっと奥が深い。

「桜島や錦江湾を庭の景色に取り入れた借景庭園」であることに注目してみました。



現在の御殿前下庭

### 薩摩藩島津家別邸「名勝 仙巖園」

—仙巖園は、万治元年（1658）に19代島津光久が築いた別邸です。桜島や錦江湾を庭の景色に取り入れた借景庭園で、その雄大な景観を活かして、島津家・薩摩藩の迎賓館のような存在でもありました。（仙巖園公式ウェブサイト）—

—仙巖園が位置する磯エリアー帯は、平成27年（2015）に「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録されました。（鹿児島県観光サイト「かごしまの旅」）—

## 本当の姿？

美しく雄大な桜島の眺め、庭園が造られたときの“本当の姿”ではありません。

いま錦江湾との間にある道路や鉄道は無く、仙巖園はもともと直接海とつながるお庭でした。

線路も電線も車の音も無くしてみたら？

いま見えるものがちょっと違って見えてきます。そしてひとつ気になるところが・・・



## あの石が気になる

御殿前下庭の中央から離れたところ、2つの石が妙に気になる。何か意味ありげ！



仙巖園中央から離れてポツン

近づいてみると薄い石、手前の石組には階段もついている。

目の前の生垣は道路との境界。庭園が海につながっていたころはどうなっていたのか？

ちょっと小高く山のように見せていたのでは？



この石組は桜島の稜線と同じ角度を描いて、中景をつくっています。

重なり連なる線によって、桜島が借景であることを強調する石組であると考えられます。

## 山の奥深さを描く石

旧島津氏玉里邸庭園の石の使い方と似てる！

玉里邸茶室から眺める滝奥の石組。

山の稜線が幾重にも重なり、山の奥深さを石の重なりで表現した手法が見られます。



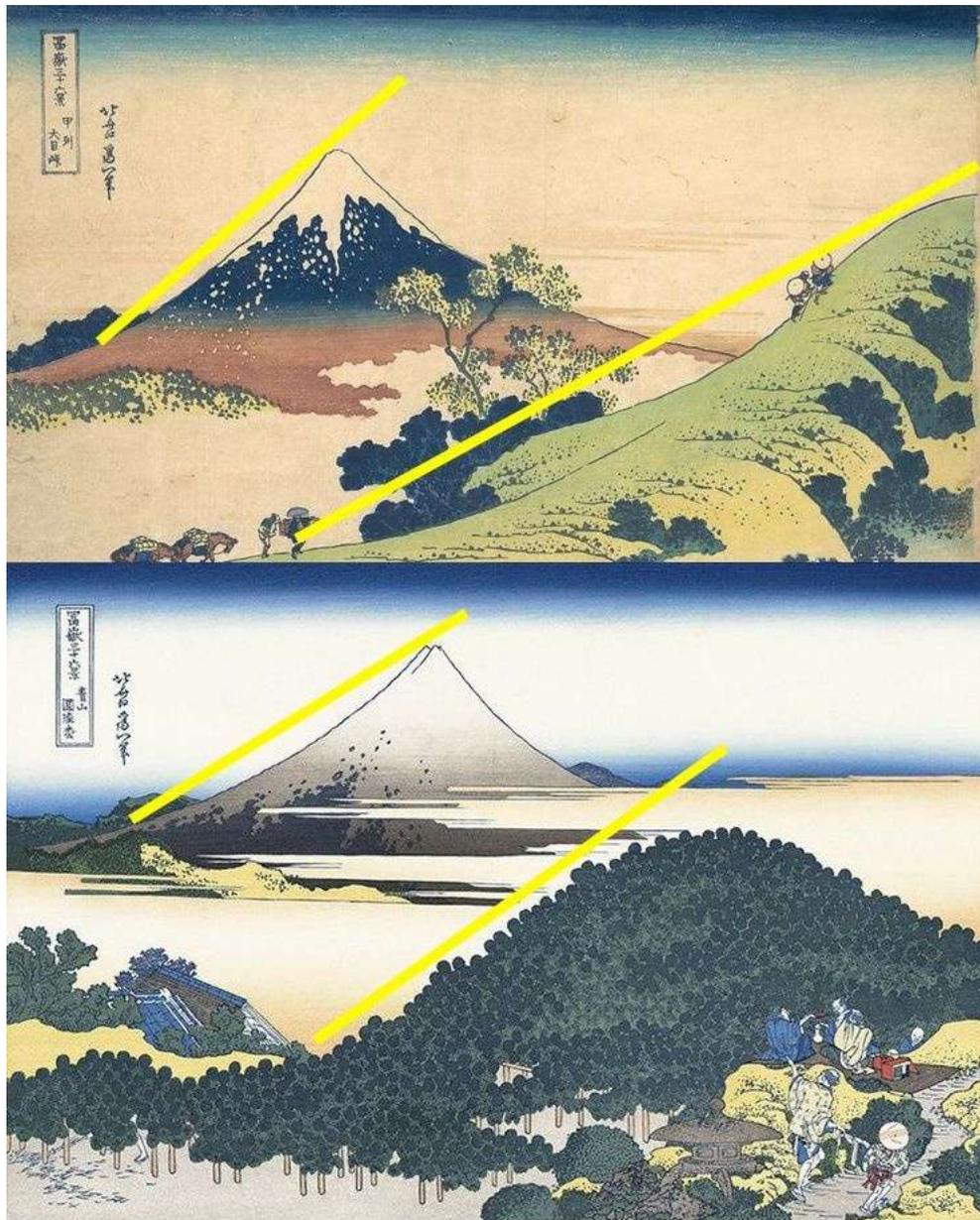
玉里邸庭園の滝へと至る石組では、常緑樹で被い薄暗くした中に幾重にも重なり、石の重なりで山の奥深さを表現しています。

“蓬莱山”の横を奥深い森から湧き出た清水が流れ滝となり落ちていく姿を見せています。



この手法は江戸時代の浮世絵にもたくさん！

遠くの富士山と目の前の山の稜線を合わせて奥行きを見せ、画面をまとめる手法が見られます。



仙巖園の気になる石も斜めの角度が桜島の稜線と合っている。連山であること、桜島を借景として取り込んでいることを表現、強調していると考えられます。

## 海に開かれた庭

直接海につながっていた仙巖園の様子を想像してみると・・・



名勝 仙巖園 現在の庭園



仙巖園 江戸末期想像図

白い砂浜の向こう、青い海に浮かぶ桜島・・・このお庭が本当はどんな景色を描いていたのか見えてくるようです。浜辺に打ち寄せる波の音も。

磯の浜から SUP ボードで海に漕ぎ出せば・・・海に開かれた御殿とお庭だったのでは？

今は防波堤に囲まれているけれど、海から仙巖園のほうをしてみるといろいろ感じます。

侍やお姫様が船で漕ぎつけて入っていく・・・仙巖園の見方がもっとおもしろくなるかも(\*^-^\*)



防波堤がなければどんなふうになら・・・松林の間に御殿が見える？



## 2 錦江湾の若尊石

---

### 錦江湾の石

仙巖園の庭石はほとんどが錦江湾で採れた石。

この石が錦江湾との連続性をつくり、“錦江湾”を庭園に取り込むことに。

借景がなじむというワケ!(・v・)b

御殿の軒下手水鉢の流れや池の護岸、亀石や鶴灯籠の台座石など庭園の要所要所に使われています。

柔らかい部分が長い時間をかけて波に削られポコポコと穴のあいた風合いのある石です。



仙巖園前の迫力ある若尊石。

小さいながらも逸品です。



## 「若尊石」

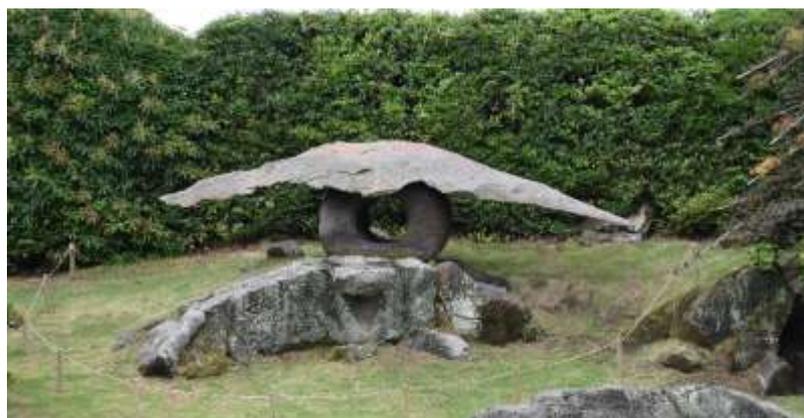
この特徴ある石は“溶結凝灰岩”で、鹿児島でのもう一つの名は「若尊石（わかみこいし）」。

その由来は石の産地、錦江湾の最奥の岬「若尊鼻（わかみこばな）」から。江戸時代から昭和の初めまで、大隅の玄関口“福山”に商用の荷を下ろした船が、帰り荷として近くの若尊鼻から石を積み鹿児島の港まで運ばれて庭石として使われたそうです。

若尊神社もあって“若尊”は神話の地。そして海底火山やカルデラの名前でもあり探っていくと奥がかなり深そう！



亀石



鶴灯籠（現在は若尊石の特徴がわかりにくい）





御殿縁側から見える池の護岸石

この石は運んだのではなく現在に地にあったのではと思わせるぐらいの大きな石です。仙巖園の見どころのひとつです。



現在の若尊海岸に見える若尊石

### 3 磯石が表すもの

---

#### 「若尊石」は珍しい？

同様の“溶結凝灰岩”を使用している庭園は関東に多く、黒ぼく石や磯石と言われて池の護岸などに使われています。小田原の海岸で採取される「黒ぼく石」は波で洗われ丸みを帯び、海岸の景色を表現するにはふさわしい石材です。



清澄庭園の伊豆磯石 東京都

仙巖園の池の護岸にもよく似ています！

入り口近くの小さな流れの横には「伊豆磯石」と名前のついた大きな立石が。

ほかにも、沢飛びと石橋・小さな岬・園路の土留め石などいたるところに。



旧古川庭園の黒ぼく石 東京都

土留めとして多孔質で軽い黒ぼく石が用いられ、年月が経ち表面には苔などが厚く生育しています。





萩城の磯石 山口県



鬼ヶ城海岸 三重県熊野市

日本国内の火山のある海岸には、波により浸食された磯石がよく見られます。

## 4 山灯笼の魅力

山灯笼（化け灯笼、野面灯笼（のづらとうろう）とも）

自然の石を集め組み合わせてつくられる灯笼。一般的には下から土台石・竿石・中台石・火袋石・笠石と五石の組み合わせ。関東から九州八女地方まではこの組み合わせが見られる。

仙巖園には印象的な「山灯笼」がいろいろ(\*^^\*)不思議な？個性的なものばかり！近くで見たい！そしてこの石灯笼たちも海に開かれた借景庭園だからこその特徴があるみたいです。

### 石が少ない



御殿前下庭への入り口近くにある大きな山灯笼「獅子乗大石灯笼」。とにかく笠がでっかい！

立て札に「29代島津忠義が明治17年（1884）に造らせた園内最大の石灯笼です。灯笼の上部には、江戸時代の別邸、花倉御飯屋にあった飛獅子が乗っています。笠石はかつて磯浜の海岸にあったもので、たたみ8畳ほどの大きさがある非常に大きなものです」と説明があります。

八畳！！！！

尋常なくデカイ。

そして、てっぺんの飛獅子はかわいいのでカメラズームでよく見てください♪

デカイけど全体を見るとどことなくすっきりシンプルな印象。

実は一般的な山灯笼に比べて“石”が少ないです。

### 台と火袋と笠

「獅子乗大石灯笼」は石を組んだ台座の上に火袋、笠石があります。一般的に五つの要素（土台石・竿石・中台石・火袋石・笠石）で構成されるところ、三つだけでできています。少ない要素の中で大きく広がる笠石が横長を強調しています。

明治時代、背景には多賀山が連なり、左手には磯浜・松林・錦江湾・対岸の大隅が見える・・・自然な

石の灯籠、横広がり笠も調和して視界の邪魔なく溶け込んでいたのかもしれませんが。  
借景で空間がどこまでも広がる庭にあわせて、工夫された山灯籠と考えられます。

## 普通じゃない

仙巖園にあるこのほかの山灯籠も個性的なものがそろいます。並べてみると笠石が横長でユニーク、おもしろいです。特に御殿前下庭は、海に開かれたお庭を上から見下ろすスタイル。借景の錦江湾や桜島に調和するかたちなのかも。



日本で初めてのガス灯となった「鶴灯籠」  
手前には“亀石組”と思わせるものもある。



2本の石の上に火袋が乗る山灯籠  
こちらもおそらく鶴灯籠。2本の石が土台となっているのがおもしろい。



変わり種の「方形火袋有飛亀笠石灯笼」  
名づけるとしたら方形火袋有飛亀笠石灯笼。

空飛ぶ亀のかたちの笠に目を奪われるが、台座もおもしろい。雲のようで斜めに流れている。

## どう違う？

他の庭園、熊本県八女地方以北の山灯笼を見てみると、土台石・竿石・中台石・火袋石・笠石の五つの組み合わせで整えられています。それぞれに個性的な自然石を使いその風景になじんでいます。



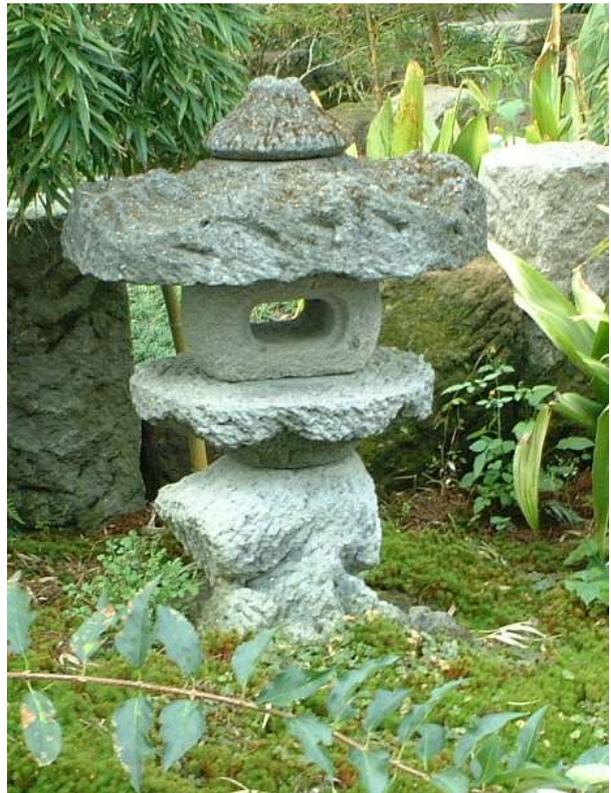
根津美術館山灯笼 東京都



清澄庭園山灯籠（讃岐御影石） 東京都



鍾乳石の山灯籠 山口県



八女石の山灯籠 熊本県

でもこれらを仙巖園の、海に大きく開かれた開放的な借景庭園に置くと違和感？かもしれません。

## 借りた景色に

現在の仙巖園にある「春日灯籠」もそれだけをそのまま想像図に残すと何か変？



仙巖園 春日灯籠を残した江戸末期想像図

春日灯籠は縦長の灯籠で、樹木のある神社やお寺など木立（縦の線）の中に設置すると調和する灯籠です。

仙巖園の山灯籠は「桜島や錦江湾を庭の景色に取り入れた借景庭園」だからこそその工夫で、積み上げる石は少なく横に広がる笠など他にないかたちとなったのでしょう。また海から見たときには灯台のような役目もあったのではないかと考えられます。

春日灯籠

竿が円形、笠・火袋・中台・地輪が六角平面で、背の高い標準的な石灯籠。春日大社に多く用いられているところからいう（大辞泉より）

## 5 ソテツが意味するもの

---

### 反橋の向こうに

他の日本庭園にあまり見られない「ソテツ」。

仙巖園では、御殿前の主庭にある反橋（俗域と聖域との結界の役目）を渡りきると右側にソテツが。

なぜここに？？？単に薩摩は南国だから？

なんとなくソテツは南国～とか外国～なイメージ(\*'▽')ほかの木とは明らかに違う！

そもそも江戸時代にソテツあったの？



仙巖園御殿前の池にかかる反橋…向こうにソテツが

反橋（そりはし）

中央が高く、弓状に曲線を描いている橋。太鼓橋。（大辞泉より）

神社やお寺、また伝統的な池をもつ日本庭園では俗域と聖域（この世とあの世）との結界の役目。

## ソテツはどこから？

ソテツは熱帯や亜熱帯（台湾や沖縄、奄美など）に自生する寒さに弱い植物。

江戸時代初期、ソテツは権力を示す庭木として植えられ、異国情緒が珍重されていました。今は事情が違います。

有名なところでは、二条城・桂離宮、西本願寺の大書院庭園などに植えられています。

藁をかぶったお化けみたいなこの写真は二条城二之丸庭園の“雪囲い”されたソテツ！



寒さに弱いので寒い京都ではこのように毎年雪囲いをしないと育ちません。このように大事に大事にされて生きてきました。庭園ではかなりの異彩、存在感を放っています。



江戸・六義園の雪囲い、東京都



尚古集成館 仙巖園隣接



ソテツ通り 仙巖園



立花氏庭園中庭の蘇鉄群 福岡県柳川市

## 反橋と蘇鉄

反橋の役目とあわせて考えると・・・反橋の向こうに植えられたソテツは“異国”、聖なる世界を表現する庭木として植えられたのかもしれませんが。反橋の向こうにはこことは異なる世界がある。

現代の鹿児島では公園や個人の庭でも見かけるソテツですが、江戸時代にはとても貴重で今でも大切に守られていることを知るとうれしくなります。

仙巖園は奥へ進むとさらにおもしろい魅力が見つかります。「桜島や錦江湾を庭の景色に取り入れた借景庭園」だけではない世界、時間が許せば奥の奥まで散策してみてください。